

その祐天の徳は町中に広まっていたことが知られるであろう。

第二項 桂昌院と祐天

祐天は前述のごとく庶民との接点を保ちながら、將軍家との関係をますます深めていく。宝永二年になると、正月二十九日に門周が、二月二十六日・四月二十一日には了也、三月二十一日に門周と祐天、四月晦日・閏四月二十五日・九月四日に門周・了也・雲臥、三月二十九日・五月十日・十月二十三日に門周・了也・雲臥・祐天、十一月十一日に門周・祐天をはじめ天徳寺、幡隨院らが登城している。

増上寺の大僧正たちがこのように頻繁に奥に呼ばれるようになるのは、この年が初めてである。このように宝永二年だけでも五回祐天の登城した記録がある〔『浄土宗大年表』、『常実記』、『隆光僧正日記』（二、続群書類従完成会、昭和四十五年）〕。

この年六月二十二日、桂昌院ついに終わりのときを迎えた。『檀通書附』に臨終の様子が記されている。

桂昌尼公終焉之砌祐師登 城_二有_二御対顔_一 十念授与撮取之糸握_二両手_一 而終焉不_レ乱

〔割注〕 貞譽僧正證譽湛譽 三僧正各列座而以称名同音已上刻即如_レ入_二禪定_一

とあり、三僧正を後ろに置いて、祐天が善知識を勤めたとしている。

隆光の記した『隆光僧正日記』のほうがより客観的に捉えていると考えられるので、ここに見ていきたい。危篤状態になるのは前日の二十一日であった。日記によるとこの日は浄土宗の僧侶は呼ばれておらず、隆光をはじめ進休庵、護国寺が詰めていた。しかし、二十一日は「御必死之御様態にて御座候得共、御脈少も不変候之由」で、その日は僧侶は退出している。翌二十二日は「明六ツ半過、又護国寺下屋敷へ告来」、護国・進休庵・隆光が「御側に罷在、臨終御正念之御祈祷、抽丹誠」その後

貞誉大僧正、伝通院、朝五ツ半時被参、十念授け被申上、正念に御受被遊、随呼
吸伝通院、念佛唱之、少も無御苦惱、四ツ時逝去也、理趣経一卷等誦之、貞誉、
伝通、念佛被申、其内に誓願寺、安養院被参、其後増上寺方丈被参、八ツ時分、
護国、進休、備後殿、同道にて御本丸へ参、於い御休息御目見、御悔申上、御愁
嘆不被遊候様に、随分御諫申上

とある。

將軍家のお抱え僧のような立場にあった隆光らが、病気に伏せったとき（五月三十日）からずっと桂昌院に付き詰めていた（『隆光僧正日記』）。しかし、どのように連絡がいったか不

明であるが、浄土宗側の僧として了也と祐天がまず駆け付けた。幸いにも臨終に間に合い、祐天の念仏に送られて静かに往生したことが記されている。『檀通書附』は少し脚色されているが、祐天が臨終行儀を実践したこともこれで明らかとなった。何よりも桂昌院の信仰が了也と祐天という個人に向けられ、増上寺に向けられていたのではなかったことが今の記述より理解されるところであろう。

翌二十三日の葬儀は増上寺で行われたが、

貞譽大僧正引導也、証譽大僧正も方丈も一同に三拜、作法有之、次に伝通院等、
浄土宗之焼香畢

（『隆光僧正日記』）

と、すでに隠退した了也が導師を勤めたのである。こうして、桂昌院は増上寺に葬られ、霊牌所も作られた。最後は浄土宗に帰依した姿で葬られたことは、祐天の力と言っても良いであろう。

『常実記』附録中（七三六頁）に祐天と桂昌院の会話が載っている。場所が増上寺であるのでおそらく隠遁中の話と思われる。内容は、

僧徒などは学問をつとめ。臆次により。次第に昇進いたし候へども。將軍家に

は機務の暇なくおはします御身もて。典籍に御心をつくされなば。はてには御精力衰耗して。御病のいでむもはかりがたし。少しく節量し給はゞよろしからむ

と祐天が將軍を氣遣うと、桂昌院は

政務の資となるべきは。第一文学にすぎたるはあらじ

と言つて、逆に祐天が諫められたと言うのである。綱吉と桂昌院の政務に対する姿勢がうかがわれ、また祐天と桂昌院の關係の一端の表れたエピソードである。

第三項 綱吉と祐天

『略記』によれば、祐天は綱吉に対して二度法門を行つてゐる。一回は「諸徳集会」ときと書かれており、『常実記』にも記述がないため明確な時期が確定できないが、もう一回は宝永四年二月二十四日に行われた御前法門であつた。

「浄土本」伝記に先に記されているので便宜上「一回目」とするが、その法門の内容は次のようであつた（以下『略記』より）。